ISSUES #07

- 働くための空間や仕事において
  デザインとアートとの違いとは何か？
- コロナによって生まれた「お金」に関する
  新しい価値観とは？
- まちづくりの総合ソリューション企業として、
  デジタルツインをいかに推進して行くべきか？

EXTREAMER INTERVIEW

アートの持つ
オーセンティックな価値観をベースに、
都市や建築・社会システムを眺めると
見えてくる景色

YANAY GEVA氏

アートキュレーター・丸紅イスラエル支社勤務

イスラエル人。2005-2007年まで京都大学で社会学を研究。京都大学行動社会学の修士課程を卒業して博士課程入学後、2011年の始めに大学を退学して帰国。京都大学での研究テーマは『男らしさの研究』2011-2017年までスタートアップ企業で活動後、e-コマース、フィンテック、といったところで様々な仕事をしながら、二番目の修士課程になるエルサレム芸大を卒業。アートキュレーターとして活動しながら、2018年に総合商社である丸紅に入社し、現在イスラエル支社でイノベーションのためのテクノロジースカウティングを担当している。
アートやテクノロジーに関しての輝かしい経歴の一方で、優しい人柄のヤナイさん、大の親日家として日本に対する深い洞察力を持つ。世界一のイノベーション国家の一つであるイスラエル、その中心的都市のテルアビブのコロナ事情を踏まえながら、アート、都市、資本主義、DXなど、多岐にわたるテーマについて、ヤナイさんの考えを伺った。

オフィス環境における創造性の追求はまだ始まったばかり

私は建築という世界にとても敬意を抱いています。企業の中では、建築が真剣に捉えられていないと思います。例えばオフィス環境では、我々は従業員に対して常に革新性を求め、「アーティストのように考え、クリエイティブであれ」と促す一方で、それに見合った正しい環境を与えていません。

芸術的な爆発、ムーブメントが起きるのではないか

テルアビブのコロナ感染流行は数ヶ月ほど前までにはコントロール下におさまったと思っていました。20%の人々をのぞいて、2回目の予防接種が終わっています。私の両親は70代ですが、来週3回目のワクチンを打つ予定ですし、40代以上も同じく接種予定です。

街へ出てみると、平常時とほぼ変わりませんが、日ごとに感染者が増加しているため、美術館やライブ会場などに入場する際にはワクチン接種証明書の提示が必要となっています。

アーティストたちには国からのサポートがないので、パンデミックによる影響を最も受けている職業の一つと言えます。街へ出ると、平常時と同じようにも見えますが、どこかまだ自由な気持ちにはなれません。今頃きっとアーティストたちはそれぞれの家で粛々と活動を続けていて、いつかこのコロナを制圧できたとき、何か芸術的な爆発、ムーブメントが起きるのではないかと期待しています。

デジタルツインに関して日本の製造業に期待

日本の製造業、企業は変化に対してもっと前向きで受容的になることが重要です。日本のもっとも大きな競争相手である中国は、変化に対して非常に強い。日本はものづくりにおいて強力なバックボーンを持っているが、マインドセット（考え方）を変えなければいけない。そこが弱点になっている。変革を恐れずに取り入れていった者だけが、長期的な競争力を維持していけるのです。

コロナは資本主義の再構築を促す触媒

改めて思うのは、お金はただの道具だということです。働くために生きるのか、生きるために働くのか。お金は目的ではなく手段です。儲け主義の社会は変えていく必要があると思います。年次財務報告書ばかりに気を取られていないで、人間として生き、成長していくためのお金の使い道を考えるべきです。

コロナによって我々は既に変わったとも言えます。気候変動によりさらに変化に敏感になりました。日本政府による2030年を目標とした脱炭素化への宣言は非常に思い切った決断であり、持続可能な社会に大きく寄与すると思います。持続可能性はイノベーションにつながり、建築、再生可能エネルギー、といったことへもつながっていきます。ですからコロナウイルスは、我々がこれらのことを無視できない問題としてより真剣に考えるための、触媒なのかもしれません。

変化は副産物を生み出すだけでなく、我々の生活における全てに直接影響を与えているのです。そして我々のお金の稼ぎ方は変わり、資本主義は再構築され、新しい現実に適応し、全てが変化していくでしょう。

Interview ／ 2021.08.18 オンライン